

みつくら

令和 3年 1月15日 第330号
発行 大瀬川活性化会議
編集 「みつくら」編集委員会
花巻市石鳥谷町大瀬川10-45-2
大瀬川振興センター 電話45-6472

“お〜い!集まろう!創ろう!みんなの大瀬川!”

大穴、湯ノ沢の名農道に砂利敷

葛丸川南側の一ノ留橋から西へ行く大穴農道と、旧田中堤の西側を林沿いに北田家(辻村康幸宅)までの湯ノ沢農道に、葛丸の農村環境を守る会では11月25日迄に砂利を敷いた。

農道が狭い為に2屯車で砂利を運び、合わせて36台分を敷いている。雨が降れば、ねらねらずがったのが改善されると思われる。

地域活性化のヒントなどを学ぶ

第8区農家組合(畠山信幸組合長)では、例年7月に実施していた移動研修を新型コロナウイルス感染症対策で延期していたが、11月22日に大瀬川構造改善センターで「農村研修会」を開催した。参加者は来賓や講師も含めて32名であった。内容は、農協から「農協及び石鳥谷農業の現状について」、花巻市の高松第三行政区ふるさと地域協議会から「地域活性化の歩みと課題」、国際情報ビジネス協同組合からは「農業に於ける外国人技能実習生の概要と現状」の三つであった。

畠山信幸組合長から「雨模様の中、ご参加を戴き有り難うございます。今年になってから総会も書面議決となり、皆さんと会う機会も有りませんでした。今日は3人の講師さんからお聞きする研修会を持ちました。地域興しの一助になると思います」と挨拶された。来賓の藤原正彦花巻農協理事は「本日の研修会を開催されました事に敬意を表します。今年になってからは、どこからも招かれる事が無く、8区農家組合さんが初めてです。熊谷前理事の後を継いで組合員の為に任務を全うしたいと思っておりますのでよろしくお願いします」と祝辞を述べられた。

続いて講演に入り、石鳥谷営農センター長の佐藤健氏は「今年の作況指数は102で平年並みでしたが新型コロナの影響で、外食が少なくなった為米の販売価格は値下がりし、在庫量も多くなっているため今後の大きな課題と考えています。また、石鳥谷地区では例年に比べてカメムシ被害が目立

った年でした」と話された。

次に、高松第三行政区ふるさと地域協議会事務局長の熊谷哲周氏の「地域活性化の歩みと課題」は、大瀬川としても参考になるとされる講演であった。その内容は、高松地区で取り組んでいる「地域の足」について「高齢者が免許証を返上したあとの交通手段をどのように守って行くか」であった。高松地区では、白タクにならないような送迎手段の勉強を重ねた結果、2年前に法律が改正され、「利益を上げなければ、地域活動として自家用車で送迎が出来る」という事を知った。そこで取り組んだのが「自動車による通院や買い物支援活動」であった。車の使用料はボランティアだが、ガソリン代と幾許か(いくばくか)の運転手への謝礼分は利用者が負担して、利益を上げない活動のために国から認められて活動している。

最後の講演は国際情報ビジネス協同組合理事穴戸諭氏から「農業に於ける外国人技能実習生」についてであった。日本で農業を学びたい外国人は多くいるが、国で定めている法律では、年間を通しての実習が義務づけられているのに対して、花巻市周辺の農業は冬期間の実習が出来ないので難しいのが現状との事であった。今回の第8区農家組合の研修は例年の懇親会こそなかったが、有意義な勉強会となり参加者も喜んでた。

オフロードレースの魅力語る

去る、12月13日大瀬川改善センターで第67回大瀬川歴史探訪講座(第23回大瀬川ゆかり人講演会)が22名の参加で開催された。今回の講師は熊谷静治さんで「オフロードレースの魅力」を語って頂いた。

熊谷さんは、高校卒業後に陸上自衛隊の戦車隊に4年間勤務し、戦車砲の装填手や銃器整備を行う中、戦車大隊長の運転手を担った時期もあった。退職後も、元々車やバイクの運転や整備が好きで、昭和60年8月に4WD車の販売、整備、公認改造車の製作を行うテクニカルオートを開業し、店の宣伝を兼ねて自分でも改造・整備してオフロードレースに参加。市販車改造車(Xクラス)での入賞回数も多くなるとレースの魅力に益々燃え、改造用の加工機材を増やしながら独自で一からフレーム・ボディ・足回りそして、エンジンを改造する改造無制限車(Pクラス)に挑戦した。初めての参加では、強度不足でタイヤが取れるなどのアクシデントを繰り返し、1年後にはクラス優勝した。この頃になるとスポンサーも付き支援を頂くようになったがメーカーが作る車両の凄さを感じたと語って頂いた。

その後も、「岩手の熊」と呼ばれて仲間を増やし平成5年には熊谷さんが主催する「IBC東日本スーパースクランブルレース」を花巻市湯本で開催、全国からの参加者に混じって熊谷さんも自ら参加し、数々の入賞を果たしたとの事。また、このレースを13年間主催する中で平成7年には、熊谷さんが製作した車(全国でも数少ない一から作った)が、「岩手産業文化センターアピオ」のカスタムカーショーに展示とデモ走行を行った話も伺った。

その後、熊谷さんは息子熊谷雄二さんに引き継ぎレース生活

に終止符を打っていたが15年ぶりに昔の友達から、新潟県でのサンドレース(Pクラス)のドライバー依頼があり久しぶりの腕だめしと出場した結果3位入賞の報告があり、受講者からも感嘆の声が出た。最後に参加者から「当時、家族連れで湯本のレース観戦行った事を思い出しました。その子供が今、車関係の仕事していますよ。」の声もあり、熊谷さんのオフロードレースの車製作と運転する事への魅力を感じた講演会だった。

クリスマス会できざ

9区たんぼの会(熊谷幸子会長)では、皆が楽しみにしていた12月23日に「クリスマス会」を行う予定だったが新型コロナウイルス感染症が収まらず拡大傾向のため会合での飲食自粛が叫ばれ、止む無く中止となり、急遽役員で「お弁当」とささやかな「プレゼント」を会員に届け大変喜ばれた。

また、1月20日10時から「いきいき講座」と「大東元気でまっせ体操」を予定しているため、感染対策(マスク着用)の上で参加をお待ちしている。

ブルリの杜にログハウスが寄贈される

ブルリの杜(熊本葉一施設長)に「通りゃんせ基金」から去年の3月にログハウスの組立てキットが寄贈されていた。

岩手放送で毎年12月24日から25日にかけて生放送で行われる「ラジオチャリティ・ミュージックソン」で募金されたお金で、音の出る信号機や福祉施設で必要としている福祉機器や機材を贈っている。ブルリの杜でも応募したところ希望が叶って3月にログハウスのキットが送られてきた。キット品なので職員が自力で組み立てを行い使用できたのは5月からだった。広さは4帖くらいで丸太の外観を生かした建物である。

神山浩樹アナウンサーのインタビューで鎌田今子さんは「通所者は音に敏感な人もおり、また気分の起伏が大きい人がいるため、このログハウスで気分転換をはかる為に使用している」と話していた。現在通所者は18名に増えている。

今年度のU字溝布設は5ヶ所

葛丸の農村環境を守る会(板垣幸夫会長、構成員世帯240戸)では、令和2年度の事業で実施のU字溝布設工事は、合わせて5ヶ所となった。昨年度から、1ヶ所の工事費は200万円以内と決められたので、緊急性の高い順に施行している。

内訳は外谷地堰が2ヶ所、石森農場北側は法面崩落しているためU字溝布設工事で対応し、もう1ヶ所は金矢道路の西側で、水路の落差溝が破損しているところである。他には上新田堰の照井壮太郎さん宅付近、上口堰の熊谷賢良さん宅から200m北側、越田堰の板垣吉彦さん耕作地付近の5ヶ所であった。

みつくら

令和 3年 1月15日 第330号
 発行 大瀬川活性化会議
 編集 「みつくら」編集委員会
 花巻市石鳥谷町大瀬川 10-45-2
 大瀬川振興センター 電話 45-6472

“お〜い!集まろう!創ろう!みんなの大瀬川!”

今年のたろし滝測定は

大瀬川たろし滝測定保存会(板垣寛会長)では、第47回測定会の概要を1月10日に役員会で決定した。概要は、コロナ禍のため総会は書面議決とし、測定日は例年どおり2月11日10時からだが、花巻市や保健所の助言により、ひつつみと甘酒の振る舞いはせず、代わりに市販のものを数量限定で提供し、神楽奉納・歌唱は行わず神事と計測を行う。また、今回新調された幟旗は1月17日から2月21日まで立てる。なお、報道関係機関には事前に連絡するため、測定模様は報道されるであろう。

安寧を願って元旦祭

コロナ禍で迎えた元日の朝5時に、直町清人宮司、熊谷安久、畠山勝榮責任役員、板垣正博総代長、9区の総代、大瀬川神楽が天満宮に参集して「安寧の一年」を祈願する元旦祭を挙行了た。続いて6時から山祇神社に移動し、前述の方々の他に7区と8区の責任役員、永久総代、総代での元旦祭を執り行った。この元旦祭に先だって役員の方々は、12月31日の朝8時30分から天満宮や山祇神社に、祭壇や提灯を飾るなど元旦祭の準備をしたが、コロナ禍の為に例年の夜を徹してのかがり火などの宿直は取りやめている。

新型コロナに明け暮れた1年

50年後に「みつくら」を読んだ時に「そうだったのか・・・」と思われる様に、コロナの1年をまともしてみた。令和元年11月に、中国武漢市で発生した新型コロナウイルス感染症は、瞬く間に全世界に広がり、日本でも令和2年1月16日に初めて感染を確認して以降、全国に感染が蔓延した。全国で唯一発生が無かった岩手県でも、令和2年7月29日に初の感染者が発生し、花巻市からも同年11月18日に初感染を確認した。令和3年1月8日現在の感染者は、世界で8807万6175人(死者189万6175人)、国内で27万4807

人(死者3963人)、県内で410人(死者24人)、花巻市では12人(死者0人)と、特に元日からの感染拡大は急激で、1月8日の国内感染者は1日だけで7、882人を数えた。その間、私達の暮らしも大きな変化を余儀なくされた。昨年2月には花巻市に新型コロナウイルス感染症対策本部を設置し、市民には外出等の自粛を要請し、集会にはマスクの着用と体温の記録が義務づけられた。その後、2月28日には市の通達で市が管理する施設が全面的に使用禁止となり、各地区振興センターや大瀬川構造改善センター、各自治公民館、図書館、博物館などの施設も全館閉鎖(3月から3ヶ月間)となった。このため、3月2日~19日までは市内全校で臨時休校を実施。また、各種団体の総会は総て書面議決に変更している。また、家族が亡くなくても葬儀は家族葬に限られ、飲食を伴う葬儀や法要が禁止となり、一般の会葬者への喪主挨拶も斎場外で行われた。

4月には、7日から1ヶ月半に及ぶ全国緊急事態宣言が発令され、他にコロナ禍での雇用を守るために、雇用調整助成金が発令されたり、飲食の禁止のため各団体の観桜会も中止となった。6月1日からは市の公共施設の使用禁止が解除されたが、平日の日中に限って大瀬川振興センターの使用が解禁された。6月に自粛要請で中止となったイベントは、大瀬川地区民運動会、葛丸溪流釣り大会、各団体の研修旅行などであった。7月には ひとり親世帯臨時特別給付金制度が発令され、同月の20日からは公共施設の夜間使用も解禁された。8月の清流会盆踊りやいしどりや夢まつり(花火大会)も中止で、9月には、企業の持続化給付金制度が発令され、行事では大瀬川地区敬老祭は喜寿・米寿対象者のみで式典を実施、黒森山神社例大祭と山祇神社例大祭は規模を縮小して礼拝のみとなり、神輿渡御と直会は中止した。同じく石鳥谷まつりや福祉バザーも中止で、芸文協文化祭(展示のみ)は規模縮小となった。

10月には、家賃給付支援給付金制度と新型コロナウイルス感染症対応休業支援金制度が発令した。地区内では各団体の芋の子会は総て中止であった。11月には、飲食店支援給付金と修学児童・生徒世帯生活応援支援金が発令され、大瀬川地区文化祭は、展示部門のみの規模縮小であった。12月には、花巻市失業者生活見舞金が発令され、歳末助け合い芸能会が中止している。

明けて令和3年1月には大瀬川地区新年交賀会会や、各団体の新年交賀会が軒並み中止となった中で、1月7日から2月6日までの期間を国が1都3県に緊急事態宣言を発令している。

白銀がカラフルに染まる冬花火

花巻商工会議所青年部(山影和孝会長)は12月19日の午後7時からふれあい運動公園から70発の花火を打ち上げた。これは、今年はいしどりや夢まつりがコロナ禍で中止、また、市内の花火や祭りも中止になってしまったため、市民へいくらかでも明るい思い出づくりにと企画し、資金を商工会と青年部が負担して行われた。

当日は、東側入口に本部と仮設トイレを設置し、除雪は建設業の会員が機械を持ち込んで除雪を行い、花火の仕掛けは東和町の田瀬に工場が有る「芳賀火工」が担当し、北側グラウンドの奥から午後7時丁度に約5分間で70発を上げ辺りの雪原をカラフルに染めた。

会員の家族達は駐車場に集まっていたが、広報などで知っていた人達が打ち上げ時間には、近くの道路に車を止めて冬花火を見物した。この会員の中には大瀬川の板垣和郎さんが協力してる。花火の打ち上げは奥州市と釜石市でも予定していたが大雪の為に奥州市は中止になった。

訃 報

○畑家(8区)の板垣ミツさんは、12月17日に98歳で亡くなりました。板垣さんは紫波町片寄の中島出身で、嫁がれた頃から懸命に働かれた方でした。亡くなる1年前までは、畑の草取りをするなど元気な姿を目にしていたが残念でなりません。晩年には耳が遠くなり、相手からの会話が聞き取れなくなっても身振りや口元から意味が伝わったのでしょう、笑顔で答えていたのを思い出します。

板垣さんが嫁がれた昭和17年は、戦中まっただ中で翌年にはご主人の喜一さんは3年6ヶ月間北部23部隊に入隊し、満州関東軍7235部隊に勤務したもので、その間農業を一身に背負われました。ご主人は、帰還された後も夏は師匠の畠山松右衛門(前畑家)さんと共に葺き大工(茅葺き屋根の葺き替え)、冬は酒屋働きをしていましたので艱難(かんなん)の時代を経験した方でした。

旅行が趣味で、皇居奉仕や大瀬川サービス店会で行った九州旅行などの思い出の写真を何回も見ては懐かしんでいました板垣さんに、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

○8区1班の佐藤忠治さんは、12月16日に78歳で亡くなりました。佐藤さんは、外川目の出身で、奥さんのケイ子さんは1年前の10月に亡くなったばかりでしたので続いた不幸に言葉もありません。

佐藤さん一家は、静岡県に住んでいましたが、同じく外川目出身の山林職人の菅原一夫(田中家)さんを頼って、昭和41年に旧山ノ神家に転居し、その後昭和46年から菅原昭造(元石鳥谷町教育長が住んでいた)現在地に住んでいました。12月10日には、自転車ジョイスから買い物の帰りに「行くときは楽だども、帰りはいつも踏んで(ペダルを)ねば・・・」と元気でしたのに残念でなりません。

佐藤さんは、菅原一夫さんを木切りの師匠として仰ぎ、仕事も一緒でしたが、3年前までは現役での山仕事をしていました。佐藤さんが現役を引退したのは、同僚の牧野孝男(萬吉家生まれ)さんが亡くなったのがきっかけでした。「山仕事は、夏でも午後3時に止め、後始末をするのが安全への決まりなの」と話していたのを思い出します。

穏やかな話し方と笑顔が忘れられない佐藤さんに、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。